

ザンビア南部州における農業的脆弱性とリスクに対する
対処行動・援助の相互関係について
- 農村社会のレジリエンスを考える -

¹吉村充則, ²山下恵, ³松村圭一郎, ⁴宮寄英寿, ⁴石本雄大

¹(株)パスコ, ²近畿測量専門学校 ³立教大学社会学部, ⁴総合地球環境学研究所

ザンビア南部州に暮らす人々は、天水農業に生活を依存している。また、ザンビア南部州を含むサハラアフリカは、毎年のように干ばつなどの気候変動の影響による自然環境変化の影響を受ける地域として知られている。筆者らは、このザンビア南部州のもっとも標高が低いカリバ湖岸から北に位置する台地までの地形変化を利用した調査地(サイトA・B・C)を設定し、農業的脆弱性とリスクに対する対処行動や援助について世帯の生計レベルで調査を行ってきた。さらに、衛星データや航空写真を利用した土地利用に関する解析も行ってきた。本年度は、これまでに収集し蓄積してきたデータを時系列で理解し、農村社会のレジリエンスについて考察を行った。以下にその概要を示す。

最初に、さまざまな情報を統合し、理解を進める上でのキーとなるコンセプトについて議論した。議論のキーは、農村社会におけるレジリエンスを「被害の受けにくさ」と「被害からの回復」とした。「被害の受けにくさ」とは、ショックへの頑強さと柔軟さの2つの側面がある。本研究では、レジリエンスと諸概念との関係を明確にした。農村社会におけるレジリエンスを考える上で、対応能力の解明へのアプローチを挙げ、対応能力の発露としての対処行動について、特定のショック(今回においては突発的多雨)に関して時系列順に考察した。次に、調査世帯の農民が耕作をおこなっている畑について、GPS等を用いて分布位置を把握するとともに、大雨被害前後における耕作パターンや現金獲得法の変化について時系列把握した。さらに、衛星画像の時系列解析や航空写真の時系列解析とをGISの下に重ね合わせ、農村世帯の生活について調査した。くわえて、調査地において近年急速に普及してきている携帯電話についても、コミュニケーションツールとして位置付け、この携帯電話が相互扶助における役割について調査し、贈与・援助の実態を明らかにした。さらに、同地域では、ザンビア政府やNGOが食糧援助プログラムを実施してきている。ここでは実際の食糧援助が農民の食糧不足リスクにどのように対処してきたのかを、2005年から2008年までのシナゾングウェ地区の事例をもとにそのプロセスを分析した。

その結果、調査村に暮らす農民は、多岐にわたる気候変動に対する事前的対策を取っていることがわかった。さらに実際の気候変動の影響が多雨によって顕在化した後にも、耕作パターンだけでなく、それまでに蓄えてきた資材の売買などの多岐にわたる対処行動をとることがわかった。これらの成果から、アフリカ農村社会のレジリエンスにおいては、農村内部の農民世帯だけでなく、より広いコンテキストを視野に入れ、自然環境から社会制度に至る生活にかかわるさまざまな状況の時系列かつ詳細解析が重要であることがわかった。